◆ 最優秀賞◆

いってらっしゃい、おかえり

新発田市立川東中学校　３年
宮村　萌々香

私の母はがん患者です。

母が乳がんと診断されたとき、私は小学６年生で、母ががんになるなんて信じられませんでした。それまでの母はいつも元気で家族を支えてくれる存在だったからです。母は私と弟を不安にさせないようにいつもと変わらず明るく接してくれました。けれど私は、がんがどんな病気なのか、治療法は何なのか、すべてが分からず小６の私は不安で暗闇の中に落とされたような気持ちになりました。

母が手術のために入院した一週間は家に帰っても暗く、静かで寂しい思いをしました。「たった一週間だ。」と分かっていても母が恋しく早く帰ってきてもらいたかったです。一方でそのときの自分の「母がいなくて寂しい」という感情はわがままなように思え、自分で自分が嫌になることもありました。

手術が終わり、３か月に１回の通院が日常になった中一の冬。お風呂上がりの母が「しこりがある」とつぶやきました。「ただの骨じゃない？」と私は母に返しましたが、今思えば、再発への不安を打ち消したかっただけだと思います。

父と一緒に検査結果を聞きに行った母を待つ間、弟と二人で留守番をしていました。墨で塗ったような真っ暗な外を眺めていると、一本の電話が鳴りました。

「再発していた。」

その言葉の意味を私はうまく飲み込めませんでした。私は何とも言えない悲しい気持ちになりました。初めにがんと宣告された時より、何倍も悲しかったです。

あれから、２年。今、母は抗がん剤治療を受けています。転移したがんは手術で摘出できるものではなく、薬物治療を進めるしかありません。命を守るためとはいえ、髪がどんどん抜けていく母を見ているのはつらかったです。

私はがんが憎いです。母を苦しめているがんを憎んでいます。ですが、母の病気はつらさや悲しみだけではなく私の心を成長させてくれたきっかけにもなりました。

皆さんは「あたりまえ」の日常を大切にしていますか？家族がいてくれることに感謝していますか？

皆さんにとって髪の毛があるお母さんは当たり前かもしれないけど私にとって当たり前ではありません。がんは私に自分を守り、支えてくれる存在がそこにいてくれることは当たり前ではないということを教えてくれました。「ハゲ」という言葉がどんなに人の心をえぐるのか、自分の口から出る言葉の重みと周りの人への配慮を知りました。そして、何よりそこに母がいるありがたさ、いてくれることへの感謝が生まれました。

「自分を隠すつもりはない」と、母はがんに押しつぶされず未来に向かって進んでいます。私はそんな芯が強い母を心の底から尊敬しているし、母のような大人になりたいです。だから母には、立派な大人になっていく姿をずっとそばで見守ってて欲しいと思っています。「いってらっしゃい」と送り出し、「おかえり」と迎えてくれる毎日がずっと続いて欲しいと願っています。

母の病とともに歩む生活環境は私を大きく成長させてくれました。家族がいることは当たり前じゃない、命の大切さ、支え合って生きること、今の母の姿からどんなにつらいことがあっても簡単に諦めてはいけないということも学びました。がんは５年間再発しなければ完治と言われています。完治までには時間がありますが、私たち家族は祈りながら「その日」を待っています。そして私はこれからも私のそばに母がいることに感謝して命を大事に毎日を大事に生きていこうと思います。だから私は毎日笑顔で言います。

「お母さん、いってきます。」